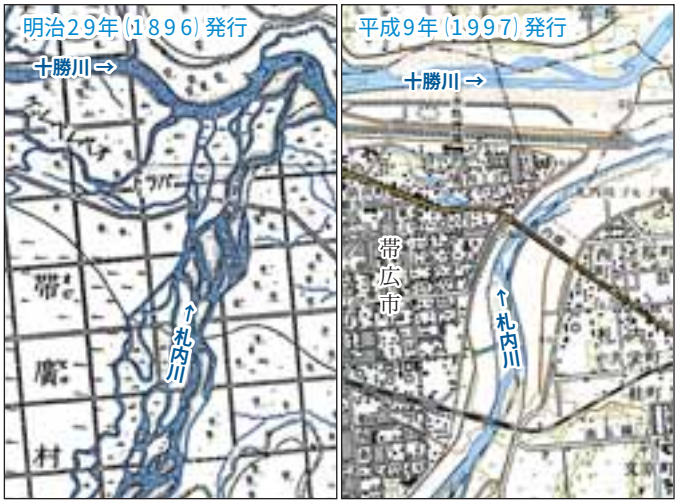
② 蛇行の減少と生き物



札内川の変化。明治29年（1896）と平成9年（1997）発行の地形図を比べる。
（国土地理院所蔵・刊行の1/5万地形図（帯広）を使用、80%に縮小）

明治時代が終わるころまで、十勝の川はほとんど自然なままでした。自然な川は曲がりくねり（蛇行し）、何本にも分かれていました。

こうした川には、深いところ・浅いところ、流れが速いところ・おそいところ、草木がかぶさっているところ・空が見えるところ、土や草でおおわれている岸・石だらけの岸など、さまざまな環境が入り組んでいます。

また、洪水のたびに、新しい流れになるため、いつも変化に富んでいました。

川の中が変化に富んでいると、小さなトゲウオのように流れがおそい水草の間を好む魚から、ヤマメのように流れがあるところでエサをとる魚まで、いろいろな種類の魚がたくさん暮らすことができます。

ヤマメ。

イトヨ。トゲウオの仲間。小さい。

札内川（中島新橋・帯広市）。今でも複雑な流れをしているが、昔と比べるとレベルがちがうようだ。

川がスッキリすると…

やがて、洪水から人の暮らしを守るため、川は蛇行が小さく、少なくされ、流れやすくなっていきました（→p210）。蛇行が少なくなると、川の中の環境に変化が少なくなります。

そうなると、それぞれの魚のすむ場所が限られていき、魚の数が減ることにつながります。

さらに、何かの理由で今すんでいる場所がこわれてしまうと、移りすむことが難しくなり、いっそう数が減ることになりかねません。

スッキリと流れやすい川は、わたしたちの暮らしには助かるのですが、魚たちにとっては、暮らしにくいものになってしまうこともあるです。

イトウが生き続けられる川は…

また、卵の時、子どもの時、大きくなった時、と成長の段階によってすむ場所の変わる魚もいます。

イトウは、上流で石がゴロゴロした川底をほって卵を産みます。ふ化したすぐあとには石の間で暮らし、その後、うき上がります。少し流れ下って、川岸ぞいの落ち葉の中などで暮らし、だんだんと流れの中にも出ていきます。

数年かけて、川を下りながら大きくなり、１mをこえることもあります。成長したイトウは河口近くまで下ることもあり、深くて岸のえぐれた場所（淵）にすむのだといいます。

毎年、春先の産卵時期になると、川の上流部までのぼり、産卵後川を下ります。（→p115）

流れに変化が少なく、また、下流から上流にのぼりにくい川は、イトウが生きにくい川なのです。

大きくなると1mをこえるイトウ（飼育：幕別町ふるさと館：※2）。大きなものは深い「淵」にすむという。春、産卵の時には上流にさかのぼる。

※2　幕別町ふるさと館（まくべつちょうふるさとかん）：幕別町依田 384-3（依田公園横）
電話 0155 - 56 - 3117　月・火曜日休館